

私の言うとおりだろ、ポプラよ、そよ風の師よ。スペインの詩人ガルシア・ロルカの詩の一節だ。

ポプラは、雌雄異株で春に花を咲かせる。学名は「震える」という言葉を語源にもつ。わずかな風でそよぐ。ガルシアは、それを「そよ風の師」と呼んだ。

そのポプラの木に、ガルシア・ロルカは同意を求めた。何について同意を求めたのか。私の言うとおりだろー、と。

わたしも聞きたい。ポプラの木に。そよ風の師に。命とはーと。

3月11日、わたしは、岩手県沿岸部の町、大槌町にいた。大槌町東日本大震災慰霊祭に出席していた。昨年6月18日以降身元が確認され、死亡が受理された人の名前



やまもと たろう  
山本 太郎

ポプラよ、そよ風の師よ

と年齢が、あいうえお順に、一人一人読み上げられる。5歳、31歳、72歳と同じ姓をもつ名前が続く。家族だったのだろうか。

悼の言葉が述べられた。「平成23年3月11日ー。以来、わたしたちは、あの日を忘れたことはありません」

会場には、中学生らしき丸刈りの男の子と小学校入学前かもしれない、まだ幼い男の子、そして父親らしき男が座っていた。男が会場で配られた犠牲者名簿に見入る。うつむく丸刈りのお兄ちゃん、無邪気にはしゃぐ男の子。しかし、そこに本来いるべき一人の姿がない。

「バッハの無伴奏チェロ」が流れるなか献花がささげられた。大槌町小学校の6年生によって、追

記憶が1年前にフラッシュバックした。最初にこの町に来た日。津波に破壊しつくされた町は雪に覆われていた。それが救いだっただった女がいた。今年の岩手は雪が少ないという。「今年は、雪が少なくてね。雪かき、助かってるよ」と老女が笑った。

1936年8月16日、ガルシア・ロルカは、スペイン内戦のなか、フランシスコ・フランコ率いる右派勢力によって逮捕され、3日後の19日、3人のレジスタンスとともにグラナダ近郊で銃殺された。享年38歳。

消え去ったものは二度と戻らない。誰もがそれを知っているー、という言葉を残して。

(長崎大熱帯医学研究所教授)